
東方再始蝕

tuki-na-mi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方再始蝕

【Nコード】

N1968S

【作者名】

tuki-nami

【あらすじ】

ぼくはぼくを殺した、筈だったんだけど、気付いた木に囲まれている。

どうしよう。

そんな彼の物語。

ある日のぼくのエピローグ（前書き）

初めまして。

投稿することは初めてなので久しぶりの方はいない筈。

では、注意事項の確認を、

・二次創作 ・二次設定 ・オリ主 ・独自解釈 ・独自設定
・
原作崩壊 ・キャラ崩壊

上記のものが苦手の方は読まない方がいいかもしれません。

誤字、脱字があれば指摘してもらえれば幸いです。

ある日のぼくのエピローグ

回想

もし、もし自分が死んだらどうなるのだろうか。
これは、誰しも一度は考察したことがある話題。
これを考察したことの無い人間は、余程の馬鹿か、生まれてから一度も不幸になんて遭ったことのないとてもとても幸福な人間か赤ん坊くらいなものだろう。
しかし今はそんな一部分の少数派は置いておくとしよう。

死んだら、どうなるのだろうか。
誰かが信じる様に、天国へ行くのだろうか。
誰かが思う様に、地獄に行くのだろうか。
誰かが伝える様に、転生するのだろうか。
誰かが言う様に、何も無い『無』なのだろうか。

それを話頭にして黙考すれば、時間などどれ程あっても足りない。
例えばその時間というものが尽きることのない永遠のときであったとしても、足りない。
その問いの答えを知っている者は、死んでしまった物だけだから。
一応解説しておく^{人間だったもの}と者が物になっているのは、死んでしまえば^{人間}者ではなく物という他愛ない理由に他ならない。

それも少し置いておいて。

自分は一体どんな形で、どんな風にこの一生に幕を下ろすのだろうか。

老死だろうか。病死だろうか。事故死だろうか。知らない誰かに、或いは知っている誰かに殺されるのだろうか。若しくは自らが自らを殺す自殺と呼ばれるものをするのだろうか。

回想終わり。

回想といっても本来ならば時間とに風化し忘れ去られても仕様が
ない、いや寧ろ忘れ去られて当然なほどに昔の回想。
何故、今になってこの様な回想をしているかというところ

自らが自らをブチ殺す、自殺と呼ばれるものをしようとしていた
からに他ならない。

1

風が吹く。

その都度制服が音を立てて揺れ、肌と密着する。

まあ、もう少し正確に言うのなら密着しているのは制服ではなく

て、その下のYシャツでもなくて、さらに下に着ている肌着のTシャツだけだ。

やはり初秋といえども寒い。薄着をしてはいけないな、とぼくは小中学生が親から口を酸っぱくなるほどにともすると喉が哽れる程言われているであろうこと思い、一人納得。

ぼくの場合は単純に寒がりという理由が九分九厘を占めるけど、そう補足しながら。

手が冷たい。誰だかが「手が冷たい人は心が暖かいんだよ!」なんて言っていた気がするけど、やはりぼくとしては心も冷たいんじゃないだろうかと思う。

しかし、そう解釈してしまうと冷え性の方も遺憾ながら含まれてしまう。

悩み所だ。

それから数分、特筆すべき事はなかった。いや、敢えて言うならばこれから逝くゆにも関わらず暖かいコーヒーで喉を潤したことから、たった今ぼくは

自らを自らで殺した。

死に方については語らない、あまり語って喜ばれるものではないし。

コーヒ―? きちん綺麗に全部飲んだよ、ご馳走様。

ある日のぼくのエピローグ（後書き）

短いすね。

次からはもう少し長くなり、幻想入りするかと思います。

後書きで言うのもあれですが、この物語の主人公の好き嫌いは分かるかと思えます。

恋愛は入れますがまだ未定です。

この主人公では誰も落とせる気がしないので。

ある日の幻想郷でのプロローグ（前書き）

誤字、脱字があれば教えていただけると幸いです。
感想もあればいただきたいです。

ある日の幻想郷でのプロローグ

目が覚めた。

無味乾燥した夢から離れ、夢よりも遥かに無味乾燥した現実に意識が収束する。

ぼんやりと目に霞がかかりながら瞼が開く。

ゆつくりと、時間をかけながら。

不確かにも空が、曖昧にも雲のようなものが、不明瞭にも壮麗な立ち木が視界に侵入する。

次に音。

ナニかの囁る不快な声、木々がざわめく嫌な声、吹き抜ける風の苛立つ声。

その次に匂い、いや、臭いというべきか。

吐き気を催す土の臭い、不快になる草木の臭い、そして止めに嗅いでいるだけで発狂しそうなほど嫌いなこのぼくの臭い。

次から次へとぼくの五感を侵して侵入する情報に、ぼくは露骨に顔を歪めた。

いつもなら怠惰にも惰眠を貪るために二度寝を。

敢えて戯けるならば「これが死後の世界か……」なんて言いたいところである。

しかし、この状況で戯けるのはぼくが許さない、いや別に戯けてもいいのだが。

その前に

ぼくはぼくをぶち殺した筈だ、それも、下手に生き残らないように。

いや、生前となんら変わりなく五感が働く状況で『死後』だと判断できるならばぼくは一向に構わない。

寧ろ死んでいて欲しいものだ、が。

誰かが信じる様に、天国へ行けていなく。

誰かが思う様に、地獄にも行けていなく。

誰かが伝える様に、転生もしていなく。

誰かが言う様に、何も無い『無』ですらない。

だからぼくはぼくが死に損ねた、そうこの段階で判断を下した。

1

先ずぼくは上体を起こし、立ち上がった。

ついでに傍らに落ちていたぼくが使っていた鞆を拾う。

それとぼくは、少し嘘をついた。

転生なんて、生まれ変わるなんて絶対にご免だ。

そんな目に遭うくらいならば、ぼくは自ら進んで地獄に堕ちる。

辺りを見回す。

一面木々に囲まれていてぼくは自然の中に溶け込めない、浮いた感覚を理解した。

ちようど、白の中に不幸にも混ざってしまった哀れな黒というのはこんな気持ちなのか、と自嘲しながら。指が思う様に動かない。

起きてから直ぐに動き出すのも動かすのも億劫だ。仕方ない、少し休んでから動こう。

2

小休止している間に気がついたのだが、木の根元、枯葉の間と様々な所から茸が顔を出しているではないか。

いや、ぼくは決して茸が嫌いとか、苦手というわけではないが敢えて茸に触れたりしない。とても気持ちの悪い色をしているし、別に進んで触るものでもないかと判断したからである。

わかったことといえば木が広葉樹であることくらいなものだ。

待て、何を得意げに解説しているんだ、ぼく。そんなことまったくもって壊滅的に欠片も関係ないじゃないか。

それともこの、どう考えても食用とは思えない禍々しい茸を喰うのか、正気の沙汰じゃない。

現実逃避もこれくらいにして、そろそろ目の前の鬱陶しい問題から目を逸らすのを諦めよう。

何時までも目を逸らすと目が端に寄ってしまうかもしれない。
まず、ここはどこだ。

解らない、それは揺るがない。
何故ならば、それが最後を迎えた、筈だった場所ではない。

そして残念ながらぼくの知る場所ではない。
ならばぼくがどれだけを拙い記憶を探ろうと、徒勞に終わるということ。

近くにあつた棒を数歩歩いて拾う。
棒を拾ったとき、無意識のうちに後ろを向いた。
微かに足跡がついている。

なら、と思い辺りを見回す。
首をいくら回そうと、目でどれだけ探そうと、土には今ついた足跡
しか、なかった。

しかしそれはあり得ない。
ぼくがここに何者かに連れてこられようと、夢遊病よろしく歩いて
きたとしても足跡は残るはず。
でないなら、空を飛んだとか。

それはない。

だが、自分の愚見を間髪入れずに潰す。
それならば、ぼくは空を飛んだこととなる。
当然ながら絵に描いたような普通なぼくは空を飛べるわけがない。
ならば飛行機やヘリコプターならどうだ。

それもない。

まずぼくをこんなところに連れてくるためだけに、そんなものを使うわけない。

万一それがあつたとしても、飛行機やヘリコプターなら音で気付くはず。
ならば

突然ここに現れたとか。

流石にぼくの想像力にびっくりだ。

ありえないだろ。

相当ぼくもキてるな、病院へいったほうがいいな。

そう自身を罵って今まで積み重ねた拙い愚考ごと捨て、拾った棒を投げた。

落ちた棒の先端の指すほうへ歩き出す。

飲み干したコーヒーの缶を踏みつけて。

グシャリ。

音を立てて拉げた。

ぼくは足にきた痛みを無視した。

こっちに進もう。

しばらく歩いて段々と日も傾いてきた。

朝も昼も夕方も夜も深夜も嫌いなぼくとしては太陽がどこにあらうが、月が新月だろうが三日月だろうが満月だろうが左程気にしないのだが、やはり 太陽がないと足元が不安だ。

幸いにも目は良い。

暗闇でない限りは大丈夫か。

教科書が多く入った鞆を背負っているため、肩が痛くなってきた。

どれくらい、歩いたのだろうか。

時間にして3時間くらいか、いや人は楽しい時間は短く感じて、詰らない時間は長く感じる生き物だ。

ならばそれもあてにはならない。

万歩計でも付けてくるんだった。

万歩計があれば大体の歩幅から計算して、どれくらい進んだのか位は解ったかもしれないのに。

いや、万歩計なんて持ってないけど。

しかも知りたいのはどれくらい進んだかではなく、どれくらいの時間歩いたのかだ。

初めて、腹時計のある人が少し羨ましく思えた。

それからもう少し歩いて。

そろそろ足も棒になりかけたとき。

どこか、木も草もない開けたところに出た。
良かった、そろそろ代わり映えのない無駄に丈夫そうな木と、禍々しい茸には飽きていたところだ。
疲れを吐き出す様に息を吐いた。

足を踏み出す

一歩。

二歩。

三歩。

景色が見えてきた。

そこにあったのは、家だった。

中央にどん、と堂々と建っている。

その家はぼくが知っている一戸建ての平均より少々大きく、壁には何かの蔓が這って、幾つか罅が入っている。

誰か住んでいるらしく一応電気はついているが、まあなんとも不気味な家である。

古そうだし。

この家を見ると、昔家の近くにあった住人を見ると呪われると評判だった『お化け屋敷』と呼ばれたいえを思い出させる。

とりあえず、この家で道を聞こう。

しばらく扉の前に立ってインターホンを探すが見当たらない。

この家はインターホンもないのか、そう内心悪態をつきながら仕方がないので扉を叩きながら呼びかけてみる。

「あ、あ、あー、夜分にすみません、少し道をお尋ねしたいのですが」

暫らく声を出していなかった為か、声が掠れる。

中からガタガタと音がして、直ぐに返事が帰ってきた。

「……………今、出るぜ」

くぐもった声と同時に（正確に計ればどちらかが早かったのだろうが）に扉が開いた、とても早く、ぼくが認識しかねるほど早く。下げていた顔を上げようとしたとき

ぼくは中を舞い、再び土に叩きつけられた。

ある日の幻想郷でのプロローグ（後書き）

今回は長めです。

今後の長さはまだ解りません。

主人公が殆ど喋らずに終わってしまいましたね。

まあ、会った大体相手は特定できると思います。

少々突っ込みどころはあると思いますがそれは次話で。

それでもモノローグが少ないと思ってしまう自分は病気で。

東方襲助魔（前書き）

誤字、脱字があれば教えていただけると幸いです。
感想もあればいただきたいです。

東方襲助魔

ぼくは中を舞い、再び土に叩きつけられた。

4

再び、と表現したが仰向けで倒れていたときを一回目とカウントしただけで叩きつけられたのは一回目か、なら再びと表現してもよいのだろうか。

呑気にそう解説しているが、状況的には結構ヤバめ。叩きつけられた事により背中を強打したことにより、肺の空気が押し出される。

「……が、あ…」

土に叩きつけられると同時に投げた何者か（いやこの蔓や罅が這っている家の住人なんだろうが、ぼくはこいつの名前を知らないためそう呼んだ）がこちらに向かって走り出し、マウントを取る。

ぼくが状況を飲み込む前に何者かは両足の脛で両腕を押さえ、下手に身動きが取れないように胸の少し下に腰を落とし体重をかける。痛い、超痛い。ていうかどんな運動神経しているんだよ、こいつ。ぼくの動きを止めた何者かは次に、何か、金属のような八角形の物体を眼前に突き出し

「私に何か用か妖怪？ ああ、この前退治した妖怪の仲間か？」
「……妖……怪……？ ぼく、は、はあ……これ以上ないくらい普通
な、人間な、あ……！」

人間なんだけど、そう言おうとした時首を絞められ、何かの潰れたような声が出た。

高い声。それも女。さらに言えば大人でなく少女のような。

確かに夜に訪ねたけど、妖怪とは流石に失礼ではないだろうか。

ていうか、ただでさえ叩きつけられて息がうまく吸えないのに首を絞められるときつい。

どうでもいいうえに、関係ないけど君は夜に道を尋ねてくる人間をこうやって退治しているのか？ そのうち通報されるぞ。

「……あのなあ、外来人を装うのはいいけど魔法の森に普通の人間は森の瘴気に耐えられないんだぜ。それに、幻想入りするなら博麗神社が無縁塚辺り。人の足でここまで来るには結構かかるんだぜ」

露骨な苛ついたような声で、こちらにさも当然なことを確認するように呼びかける。

とりあえず何か言いたかったけど、息もすえない状態では何も言えるわけがなく黙殺という申し訳ない形になってしまった。

しかし、博麗神社、という神社はともかく、魔法に幻想とはなんだかとてもメルヘンチックな香りがするな。

無理だと思うけど、そろそろ息を吸わせてはもらえないものか。

「……その状態からは殆ど当たるわけないんだが、弾幕で抵抗しないのか？」

「……ん、あゝ………？」

弾幕？と聞きたかったんだけれど声が出なかった。

まあ少しだけ声が出たからよしとしよう、何事も望みすぎは良くない。

それから少々膠着状態の後、いきなりそいつは腰を浮かせたかと思うと八角形の物体で多くの鳩尾を容赦なく殴った。

5

夢を見た。

下らない、詰らなくて、どうでもいい夢だった。

敢えて何か感想を述べるならば、その夢は明晰夢だった。

ぼくでも夢を見るのか、いや、見れるのか。

勿論、それは希望が混ざっている方の夢ではないし、希望の混ざった夢じゃなかった。

6

意識が段々と覚醒する。

起きたくない。

寝ていたままでよかったのに、夢を見続けたいわけじゃ、ないけれど。

まあ、起きてしまったものに文句をつけてもしようがないし、どうせその文句はぼくへのものだし。

億劫だが瞼を擡げる。

擡げた瞬間、目に強い光が入ったのに驚き、眇めた。

横で何か光っている、揺らめいているので電気ではないのは解った。ぼくはそれが何か確認しようと上体を起こしたとき、何かかかっているのを感覚的に感じ取り触れた。小さく呟く。

「……布団？」

かかっていたのは布団だった。

よくよく見れば布団をかけてもらっているだけでなく敷布団に寝ているではないか。

何故自分はここにいいのか、ぼくは大して当てにならない記憶を辿る。

確か、道を聞こうとしたら投げ飛ばされた上に腹を殴られて気絶したんだっけ。

うん、たしかそんな感じだったはず。

今回はぼくの記憶が役に立った。

いや、2度も3度も役に立たないならば、ぼくは何もかも記憶することを放棄してもいい気がするけど。

それと、強い光の正体は蠟燭についた火だった。

何故蠟燭、そう素直に思った。

いや待て、布団の近くに蠟燭なんて置いていいものなのか？ いや倒れても布団には到底届かないけど、万が一のことを考えないのか。

ぼくは関係、なくもないか。倒れて床をい布団に燃え移りでもしたらあつという間に焼死体の完成だからな。
寝かされていた部屋をぐるり、と見回した。

乱雑に本棚に入れられた本。

不統一に積まれた本。

倒れている籠にこれでもかが入っている茸。

壁に立てかけてある箒。

使用済みの搥り鉢と搥り粉木。

洗ったのかまだ濡れている乳鉢と乳棒。

ビーカー、試験管、三角フラスコ、鍋など転がっている。

いや、一つ一つ挙げてもいいのだが蠟燭の明かりでは見えづらいのと、物が多すぎる。

物というより、ぼくからしたらゴミだけど。

それは置いておいて。

例えばこの部屋がゴミ屋敷だろうと、腐敗した死体が山積みになっていようが助けていたただいたには変わらない。

ならばぼくは、この人に助けてもらったお礼を言わねばなるまい。
あいつはぼくを殴ったまま放置したのだから、通りすがりの方
だろうか。

ぼくはぼくを助けてくださった、人助けなんて金にならない偉勲
を成し遂げた奇恃な方に声をかけようとして、停止する。

待て、ここでぼくが恩知らずにも何も言わずに直様立ち去ったらど
うなるであろうか。慌てるのか、驚くのか、それとも笑顔で見送る
のだろうか。

なんていう思料は挿まずに、ぶっちゃけると停止もせずに、机に向
かい椅子に座っている影に話しかけた。
要するに、後付である。

「すみません」

短くそう声をかけた。

果たして、その声は届いたのか。

果たして、その声は届かなかったのか。

そればぼくの知るところではない。

相手のみが、知るところだ。

影はタイミングよく何かを落とし、都合よくこちらを向いた。

まるで、計ったかのように。

まるで、謀ったかのように。

影は椅子から立ち、ランプを持ちながらこちらに近づく。

「お、やっと起きたか」

ランプで顔と服が照らされる。

歳は十台半ば位か。

ウェーブかかった金髪で腰辺りまで伸びている。

綺麗に整った顔で、髪同様の色の眼。

特徴的なのは、ぼくから見て右側に位置する三つ編みで白いリボンで縛っている。

いや、訂正、特徴的でもなんでもなかった。

片側だけの左右相称のシンメトリーでない歪な三つ編みなど霞む。

黒い尖った帽子に白く大きなリボン。

黒いドレスに白いエプロン。

その服装は部屋に放られていた箒と相俟って、まるで、『魔女』のような印象を受ける。

止めに、ぼくを襲ったその人の声だった。

東方襲助魔（後書き）

一向に話が進まなくて何処で切るか悩んでました。
すみません。

もう少し早足で進めたいんですけどね。

地の文書くの嫌いじゃないんですけどね。

こんな形で切ってしまったので、次はもう少し早く更新したいです。
それと、1話は余りうまく書けなかったので書き直すかもしれません。

東方談説魔（前書き）

誤字、脱字があれば教えてもらえると幸いです。
感想もあればいただきたいと思います。

東方談説魔

止めに、ぼくを襲ったその人の声だった。

7

少女はランプを持ちながら、ぼくが横たわっていった布団の横に胡坐で座る。

ドレスのような服なのに、なんとも姿勢が悪い。

しかし、襲った少女となので助けたお礼を言わずに罵るべきなのか、元凶だとしても一応お礼を言うべきか迷ってしまう。

いや、この場合、罵るのが一般的な解答なのだろうけど。

しかしぼくは一般的には到底含まれない。

ぼくがこんな下らない事を黙考していると少女が申し訳なさそうな顔で口火を切った。

「さっきはいきなり襲って悪かったな、許してくれ」そう言って、軽く頭を下げた。

「いえ、夜分に訪ねたぼくも悪いのですし。」

「あれっ？ 怒っていないのか？ 気が済むまで怒鳴ってくれてもいいんだぜ」

「怒鳴ったら、喉が痛くなるじゃないですか」

「怒鳴らずに怒れば、喉は痛くないぜ」

「怒ってほしいんですか？」

「はっ、まさか。私はマゾヒズムじゃないぜ。ただ、怒られて当然のことをした、そう思っただけだぜ。まあ、あんたが怒っていようと怒ってなかりうが襲った理由はきちんと言うつもりだったんだぜ、こんなことをしてしまったが、言い訳くらいしたいからな」

そう言つて、あどけない顔の少女は微笑んだ。

ぼくは、それを詰まらなそうに仏頂面で見つめた。

後で聞こうとは思っていたが、この少女はぼくに触れられるまでも無く言うつもりだったらしい。

その場凌ぎのぼくとは大違いだ、そう内心で自分を嘲る。

理由が無かったらただの無差別暴行だしな。

それと、謝るのに胡坐かよ、というツツコミはしないほうがよいだろう。

「それはそうと、ぼくは道を尋ねに来たのですが」

「え？ あ、あー。そういやそんなこと言ってたような、言っただけなような……。ていうか、普通襲った理由を先に聞くべきじゃないのか？」

「言ってましたよ。こっちの方が優先順位が高いのですよ、事情が事情なので」

「事情ねえ……。道を教えるのはいいんだが。その前に一つ、聞いていいか？」

「ええ、いいですよ。質問に質問で返すのは余り常識的とは言えませんがね」

「いや、人をいきなり襲うような——って、自ら墓穴掘ることも無いか。」

「それはそうと、質問をどうぞ」

「ああ、悪い。んじゃ遠慮なく。脈絡も無く単刀直入に聞かせてもらうが、あんた『幻想郷』って言葉、聞いたことあるか？」

ぼくは幻想郷という単語を聞いて、その言葉に当てはまる単語を頭の中で探す。

変わった名前だ、幻想郷。

変わった名前といえば、昔だれかが硫酸町という町があると教えてくれたのを思い出す。

関係ないけど。

片手を顎の下に添えるような形をとって考えるような仕草（まあきちんと考えていたのだが）をしていたのだが、程なくして検索結果が出たのでぼくは仕草を解き少女向き合う。

「ないですね。変わった名前だし、一度聞いたら多分覚えている筈なので。」

「知らないってことは外人か……」

「外人？」

「いや、こっちの話。気にしないでくれ」

「止めてもらえませんかね」

「は？ 何がだぜ？」

「鑑真や鞍作止利と一緒にするのは」

「……それは外人じゃなくて渡来人だぜ。それに、鞍作止利は渡来系だぜ」

「へえ、そうなんですか」

抑揚を付けずに淡白に答える。

というのも、ぼくがあまり渡来人を知らない、というのがもつとも大きな理由の一つになるだろう。

もつと言ってしまえば、知らないというよりもただ興味が無いだけなどだけど。

これで渡来人の話題に食いついてきたらぼくはどうしようか、と思った。

これからは、万が一を配慮してあまり知らないことを口に出すのは控えよう、そう思った。

何度も思ったことがあるのだけれど、あまり直りそうな気がしない。いや、もう一生直らないのかもしれない。

もう、既に、死んでるか。

「何故か話が横道に逸れかけたが、ええっと道だったか？」

「ええ、ここが何処か知りたいのですけど」

「一応聞きたいんだが、あんた誰かに『人の話は黙って最後まで聞きなさい』って言われたこと、あるか？」

「ありませんね。言ったことはありませんけど」それが何か関係あるのか、ぼくは少し気になった、少しだけ。

「現在地だけ行っても解らないだろうから、事情のまったくわからないあんたにもきちんとして、懇切丁寧にサルでも解るように説明するぜ」

事情、事情ね。

道を聞くだけなのに事情なんてあるのか。

いや、確かに「○×町だよ！」と現在地だけ伝えられても分からないが、ここが日本のどこか教えてもらえれば、いくらぼくでも分かるのだが。

もしやここは日本ではないどこかなのか、事情という言葉が必要なほどの場所なのだろうか。

考え過ぎか。

この少女は日本語を話しているし、ぼくがも日本語で話して会話が成立している。

それは当然、普段から日本語を話すという外国人という特例を悉く排除したうえで、だ。

そこまで考えて、ぼくは思考を打ち切った。

答えが見出せるとは思わないし、答えが見出せたとしても、そこに行き着くまで思い巡らすことすら億劫。

というより、少女の答えを聞いたほうが格段に早い。

誰が好んで徒勞を望むだろうか、少なくとも、ぼくは望まない。
ぼくは少女と目線を合わせ、無言で次の言葉を促した。

「殻に籠った黙考はもう終わったか？　じゃあ、説明するぜ」

無言で頷いたぼくを見て、綺麗で綺麗な薄い桃色の唇の端を少し
ずつ、吊り上げながら話し始める。

———ぼくが迷い込んだ、幻想郷と呼ばれる『幻想』のように、
忘れられたものの抛り所の話

東方談説魔（後書き）

更新遅れてすみません。

宿泊研修に連行された後、PC故障しました。

学校が始まってしまったので更新速度は未定です。

東方菟集魔（前書き）

誤字、脱字があれば教えていただけると幸いです。
感想もあればいただきたいです。

——ぼくが迷い込んだ、幻想郷と呼ばれる『幻想』のように、忘れられたものの拠り所の話を

8

ここは、幻想郷と呼ばれる所らしい。

らしい、といのはこの少女の言っていることが余りにも突拍子も無いことを説明したからである。

正直、一生懸命詳説してくれた少女には悪いが、ぼくはあまり信じていない。

もし少女が話した幻想郷の詳説の中から切要そうなものを択るならば

東の国にある人里離れた辺境の地、幻想郷、八雲紫、妖怪、幻と実体の境界、博麗大結界、常識の結界これくらいなものか。

まあ、他にもマスターズパークだとか風見なんたらさんとの手に汗握ること間違い無しの駆け引きもあったが、そこは残念ながら関係なさそうなので省くことにする。

少女はその話題を口にしながら拳を握ったり、得意気な顔をしたり

していたけど。

それにぼくには致命的にも興味が無かった。

まあ、なんとも、聞き覚えの無い単語ばかりが連なっていた。
何一つとして知らない単語。

最初の一つも知らないし、最後の一つも知らない。

ぼくがいままで関わったことのない単語ばかり。

ぼくじゃなければ知っていて当然の単語だったのか、ぼくじゃなくても知らなくて至当な単語だったのか。

どうなのだろう。

今度もし誰かに遭えたなら、聞いてみるとしよう。

上記に記したように、ぼくはこの単語達を全くを知らない。

しかし少女がぼくに話した内容といえ、夢物語もいいところの、
それこそ幻想のような話。

聞いたこともないような御伽噺の様な。

そんな妄想全開のようなお話を、ぼくが、いやぼくでなくとも信じるはずが無い。

ぼくはそんなお話を鵜呑みにするほど、メルヘンチックな少年でもなければ、ぼくに一生懸命に説明してくれた見ず知らずの少女に信頼を置けるほど純粋で無垢ではなかった。

しかし、死に損ねたぼくが病院でも自宅でもなく全く知らないような場所に居る時点で絶対にありえないとはいえない。

少なくとも、零ではない。

だからぼくは、限りなく零に近い確率のしかしあり得なくはない、その程度の認識で脳内に保存することにした。

もしそれが少女が創り出した妄想だったとして、ぼくにはそれを証明する術がないのだから。

どれだけ常人に鼻で笑われるようなお話でも、無視するわけにはいかない。

それでも一番ありうるものはこんな夢物語じゃなくて、ぼくがただ単純に知らないところにいるだけというものだが。

ぼくが思考に溺れてしまいそうになった瞬間、少女が言う。

「私の勘違いで襲ってしまって、本当にすまなかったんだぜ」少女はそういつて先ほどより深く、頭を下げた。

「いえ、さっき謝ってもらいましたし、そう何度も頭を下げないでください」

「いや、でも——」

「いいんですよ、別に。誰だって勘違いなんて数えるのも億劫なほどありますから」

「だけど、なあ……。ううん……」

少女は歯切れ悪く少しずつ声を小さくしながら黙った。

人に謝られるのに慣れてないのであまり何度も何度も謝らないでほしい。

いや、まだ二回目だけど。

というか謝られるのに慣れてないってどういうことだよ、謝られるのに慣れている人間なんて、それこそどこかのお偉いさんか借金取りくらいじゃないか。

ぼくの偏見かもしれないけど。

少女がぼくを襲った理由だが。

最近割と強い（少女曰く）倒したが、後ろに強い妖怪がついているような言い草だったので警戒しているとぼくが現れたらしい。

間が悪くも。

不幸にも、夜に。

少女は先手必勝と思いぼくに攻撃したらしい。

それと、そのときすこぶる機嫌が悪かったらしい。

「あ：もう、朝になっちまったか」

「ああ、本当ですね」

「そんなことで、私が嘘をつく理由なんてないぜ」

「まあ、そうですね」

窓からは爽やかな朝日が漏れている。

それと木々が見えた。

虫や鳥の声は、聞こえなかった。

？

とりあえず、朝日も昇りお腹も空いてきたので朝食となった。
鞆は少女が蒐集してくれていたらしい。

しかしぼくの鞆には財布こそ入っていても食べられるようなものは入っていなかった。

こんなことなら何か買っておけばよかった、とは思うものの、これから自殺するような人間が食べ物なんて買う必要がない。特に後悔はしなかった。

仕方なく少女が作った具は茸のみというスープを有難く頂戴した。具が茸しかなくとも食事を恵んでもらっている身としては文句などないし、あったとして言えるわけがない。

食事をしながら情報交換をしたが、特にぼくの知っていることはなく空振りだったといっている。

それと、少女の名前は霧雨魔理沙というらしい。

食事も終わってぼくは少女が蒐集したらしいものを物色していた。少女曰く危険なものもあるがそれは部屋に転がしておいて置かないと言っていたので、特に警戒もせずに触っていた。

色々と物色したが、特に興味を引かれるものはなかった。

手も埃と砂で汚れてきた。

ぼくは手を叩いて埃を落しながら立ち上がり、それに気付いた少女が声をかける。

「どうだ？ 何かいいものがあったか？」

「いや、ぼくが見た中では特にありませんね」

「ふうん。ああ、その中だったら私に聞いてくれればあげられるものもあるぜ」

「別に、螺旋やカーテン、裸電球、ガラス球なんて誰も欲しいと思いませんよ」ただでくれると言われたとしても遠慮するものしかない

かった様な気がしたが、なにせ物が多すぎてあまり憶えていなかった。

「はぁ……、それ以外にもいい物沢山あっただろ？　それに気付かないなんて、物を見る目ないな……」

そう言って少女は手を振ってやれやれ、と言いたげな仕草をしながらわざとらしく溜息をついた。

それ以外にって、他には黴くせえ本や捨てて来いと言いたくなるほどの量の茸くらいしか見なかった。

こんな物ばかり蒐集しているような少女に物を見る目がないとか言われたくない。

足で少女が蒐集した物を突付くと、隙間から蜘蛛が顔を出す。

気持ち悪いな、と思いながら蜘蛛を足で踏み躪り、搦り潰し、床に練りこむようしながら少女に振り向く。

「長居させてもらうのも悪いので、最寄の町を教えてくださいませんか？」

「え？　私は家に住み着いた白蟻並みに構わないぜ？」

「ぼくが構うんですよ。ぼくは白蟻と同等の認識ですか」それと白蟻は気にしたほうがいいんじゃないか。

「どうせ人里に辿り着く前に妖怪に喰われるぜ」

「妖怪ね……。ぼくまだお目にかかってないんですよ、妖怪」

「へえ、信じてないってか？」

「でも『常識的』には、ありませんよね」

「言ったはずだぜ、博麗大結界は『常識』の結界でもあるってな。だから――、な？」

「こっちの『常識』が幻想郷の『非常識』、幻想郷の『常識』がこっちの『非常識』」

少女が言っていることの真偽はハッキリしないけれど、頭の片隅になら置いておいてやってもいい。

ぼくは確認を促すように少女と視線を合わせる。

その行為は、青春をエンジョイしている少女と少年のようなものではなく、酷く味気ない無機質なものだった。

どちらかが頬を染めるような展開はなければ、どちらかが微笑むこともなかった。

「ま、そういうことだぜ」

少女は多くの言葉を首を縦に振るような肯定ではなく、言葉だけで肯定した後合っていた視線を外す。

視線を逸らされたぼくとしてはこの視線を何処へやればよいのか少し戸惑ったが、蒐集した物、人によってはゴミとも立派な物としても見れる山へと視線を戻すことによって自己解決させた。

流れるように。
流すように。

その仕草は、視線を流すように戻す仕草は、とても滑らかな動きだった。

呼吸をするかのように。
その動きに無駄なんてなく。
その動きに必要なんてないほどに。
慣れた仕草に見えた。

会話が途切れる。

そりゃそうだ。

ぼくは基本的に相手の話を聞いている側。
そして少女は話す側だった。
その彼女が黙れば、言葉が切れるのは必然。

ぼくが何か話を振ることができないわけでもないが、出遭ったばかりの少女に振る話題などない。
振る気もないけど。

「あ。これから茸を採りに行くんだけど、一緒に来るか？」

あの量で足りないということか。

東方蒐集魔（後書き）

どのような休日をお過ごしでしょうか？
最近暖かくなりつつありますね。

本文ですが9が？になっているのは遊び心です。
誤字とかではないです。
次は来週中にでもあげたいです。

東方茸狩魔（前書き）

誤字、脱字があれば教えていただけると幸いです。
感想もあればいただきたいです。

東方茸狩魔

あの量で足りないということか。

10

そして再びぼくはこの草莽とし、樹の生い茂る森の中（正確には森の上空）へと少女に連行されるように舞い戻っていた。

少女は問いかけるや否や、ぼくの腕を掴み壁に無造作に放られていた箒と大作りな空の竹籠を持ち、鬱陶しいくらいの日光を燦々と放つ空へと飛び立った。

箒で。

箒でだ。

ありえない。

何処の魔女だよ。

いや、確かに魔女のような格好をしているとはいえ、誰がその少女が箒で大空へ飛び立つ姿を予想出来たであろうか。

少なくともぼくは出来なかった。

否、今般ばかりはぼくでなくとも、少なくともまともな思考回路

を有している方ならば予想できないはず。

出来る、と言う方には是非とも創作の見過ぎだと声を大にしたい。

実際に声を大にすることはないけど、そう思ってしまうほどに常識から逸脱した状況なのだ。

一体全体この箒にどんな仕掛けが施されているというのだろうか？何の変哲もないただの箒に見えるが、ただの箒は空を人を二人も乗せて空を翔ることも、風を切ることもしない。

ぼくが箒仕掛けをあれこれ考察しているうちに目的の地に着いたのか、徐々に降下しやがて地表に降り立った。
全く、ぼくは高いところがあまり得意ではないのだ。

出来れば勘弁、くらいのものの症状なので高所恐怖症ではないと思う。

高所恐怖症。

それはもつとも有名な恐怖症の一つとしてあるが、安全な場所であろうとも落ちてしまうのではないか、と危ぶみ恐れてしまう不安障害らしい。

しかし、厳密に問い詰めれば単に『高いところが苦手』ほどの生温く易しいものではなく、全高1m弱ほどの高さで身が竦むらしい。高いところが苦手なのは高所恐怖癖、と言うと聞いた。

ならばぼくも先の言葉を撤回せざるを得ない。

出来れば勘弁、くらいなものの症状なので高所恐怖癖ではないと思う。

上記のように『らしい』というのは誰かからの入れ知恵だからで

ある。

ぼくが知っていた情報でないものを得意気に解説、というの何か悪いものがある。

仕方なく考察を打ち切り箸から静かに下りる。

辺りを見回す。

周りを見回す。

片手を帽子の『鰐』の様に額に当てて、覗き込むように腰から半身を突き出し遠くを眺める仕草をする。

この行動に別段意味があったりするわけではない。

『これ』をした方が遠くが見える気がしたただけだ。

しかし期待は大きく逸れたらしい。

見え易くなるはずもなく、見え易くなることもなかった。

一つ、加筆するとぼくは目が悪いわけではない。

しかし、全くもって昨日と相も変わらない風景。

四方に茸、八方に木、十六方に草というか雑草、三十二方に落ち葉。

この光景は見飽きた。

別にこの光景に変化を求めているとか、こうなって欲しいとかそんなことを思っているわけではない。

正しく代わり映えのない景色というものも見ていて詰まらないが、代わったところでぼくの心境に変化が現れたりはない。

風景一つで胸中が変わるほど単純ではない。

要するに、こんなところに否応なく連れて来られた不満を風景にぶつけているだけである。

「ぼくに『来るか?』なんて聞いた癖に答も聞かず連れて来るなんて、随分と乱暴じゃないですか」

「あんたが早く答えないから悪いんだぜ?」

「そうですか」

答える暇なんて一瞬たりとも与えなかったくせに、そう思ったがこの少女にそれを言っても意味なんて無い気がする。現に、もう森まで連れて来られた。

今更反駁なんて遅い、着いてしまった今となっては後の祭りだ。

「それで、こんなところにぼくを連行してきて何をさせる心算ですか」

「おいおい、『連行』なんて心外だぜ」

「なら、なんて呼ぶのが相応しいんですか」

「随伴?」

「何で疑問系なんですか。それにぼくはあなたのお供じゃないですよ」

「じゃあ同行でいいぜ」

「何故ぼくが譲歩されたみたいになっっているですか」

「細かいことは気にしちゃ駄目だぜ。あんたを連れて来た理由は茸を採るのを手伝ってもらおうと思ったからだぜ」

「随伴だろう同行だろうと、ぼくがあなたと一緒に仲良く茸狩りをさせられる謂われはありませんよ」

「謂われがあらうと無からうと、どうせ森まできてしまったんだ。茸狩りも案外、悪くないかもしれないぜ?」

そう言って、少女はぼくに優しく微笑んで見せた。

『あなたが勝手に連れて来たんじゃないですか』という反論を寸で
のところで飲み込んで少女から視線を外した。

どうせこれ以上言葉を重ねたところで、結果は変わらない。

この顛末を言葉で免れたいならば一体、いくつ言の葉を重ねなければ
いけないのだろうか。

それこそ、気が遠くなるほど必要らしい。

少女は余り人の話を聞きそうに無い。

本気で嫌がるならばともかく穏便に、と言えばそう易々とは引き下
がってくれそうに無い。

面倒な少女だ。

否、魔女か。

魔女の一切合財、漏れ無く面倒かは解らないけど。

与し易い相手でないことは確かとして断言できよう。

ふと、少女を魔女として認識していたことに気付く。

危ない危ない、こんな少女、十代も半ばかそこの少女が魔女で
あるわけじゃないか。

毒されないように再三気を付けよう。

いつの日か、この少女を魔女として認識をせざるを得ない状況下
に陥ってしまうのだろうか。

いつの日か、この少女を魔女としか認識できなくなってしまうのだ
ろうか。

いつの日か、この少女を魔女として認識しなくなってしまうのだろうか。
どうなるのか。
一体。

しかし、ぼくはその思考を打ち切った。
この常識から逸脱しすぎている少女と何時までも一緒に居るわけはない。
幻想郷だの何だの言っている少女に信頼を置いたわけでもない。
こんな辺境の森に住んでいるのだ、一度離れてしまおうと二度とお目にかかることはないだろう。
何か数奇な縁があり、道端で偶然見えようとも言葉を交わすことはないように思える。

それにあのような奇抜な衣装の人間に道端で声を掛けられても少々、戸惑ってしまうだろうし。
そんなことはどうでもいい。
どうしても良くはないかもしれないが、一先ず傍らに置いておくとしよう。
経過がどうであろうと答とは近い内に見えることになるのだろうか。
自ずと出る。

急がずとも出る。
急ぐ必要はない。
急ぐつもりも、ない。

「まあ、千歩譲って茸狩りに付き合うとして、ぼくは摘み取った茸を容れるものがないのですけど」

「千歩も譲るほど嫌か。最近のガキは家から出たがらず、自然に触れるのが嫌らしいぜ」

理解できない、と言いたげに戯けるように文句を口にする。

あんたも最近のガキに入るだろう、と思ったが少女が言うように『家から出たがらず、自然に触れるのが嫌』というのが最近のガキの風潮ならばこの少女は入らないだろう。

というぼくも、外で元気一杯に走り回るよりは家に居るほうがいいけれど。

外が嫌いというわけではない。

雪の日に喜び庭駆け回る犬よりも、炬燵で丸くなっている猫の方が当てはまるだけである。

だからといって、雪の日にハイテンションで勇んで雪に追突するような人間が嫌いというわけでも、解らないわけではない。

「最近のガキはともかく、茸を入れるようなものはないから両手で持てる範囲でいいぜ」

「籠は貸してくれないんですか」

「私が容れるものがなくなってしまうぜ」

「じゃあ、その変な帽子貸してくださいよ。それに容れるので」

「なっ：！ この帽子は魔法使いには外せないものだぜ？ それを人に易々と貸してやれるほど安物じゃねえんだぜ」

らしかった。

ぼくとしてはそんなことはどうでもいい。

というか、『魔女』じゃなくて『魔法使い』だったのか。

魔法少女だったら、略して魔女、とも言い逃れが効いたのに魔法使いでは出来ないではないか。

ぼくに、魔法使いより魔女のほうが良かったけれど仕方ない、妥協しよう。

「それは残念。ぼくは両手で持てる程度の茸を採るとしますよ」

「ああ、そうしてくれると助かるぜ。二人して一緒に茸を採るもの効率が悪いから、ううんと、そっちに行ってくれ。私は真逆に行くから」

そう言って少女が指でぼくの後方を指した。

振り向いてみてもやはり森、どっちに行っても変わらない気がする。それから幾つか話し、ぼくらは真逆に分かれて茸を探しに鬱蒼としている森へ繰り出した。

東方茸狩魔（後書き）

ぎりぎり今週中に終わりました。

やはり難しいものですね。

風邪が流行っているらしいので皆さんもお気をつけください。

本文ですが、実際には魔理沙の筈に2人乗れるかは解りません。

どうなのか解りませんが、本編ではそういうことにしておいてください。

高所恐怖症と高所恐怖癖うんぬんですがwiki参照です。

間違いがあれば教えていただけると嬉しいです。

東方茸狩歩（前書き）

誤字、脱字があれば教えていただけると幸いです。
感想もあればいただきたいと思います。

東方茸狩歩

それから幾つか話し、ぼくらは真逆に分かれて茸を探しに鬱蒼と
している森へ繰り出した。

1
1

ぼくは歩いていた。

森の中を。

木の間を。

雑草の上を。

茸を狩りながらふらふらと歩く。

少女曰く、茸は赤だろうと青だろうと黄だろうと茶だろうと桃だ
ろうと黒だろうと白だろうと藍だろうと水色だろうと群青だろうと
黄土だろうと肌色だろうと緑だろうと黄緑だろうと深緑だろうと朱
だろうと紅だろうと緋だろうと橙だろうと小豆色だろうと菖蒲だ
ろうと金色だろうと銀だろうと鉛だろうと灰色だろうと透明だろうと
狩って来いとの御達しだ。

茸にはありえないような色彩が混じっていた気も大いにするが、深
く考えない。

ぼくが与えられた任務は採るということだけだ。

それ以外はぼくの知ったことではないし、万が一少女がぼくの採った茸で腹を下そうが命を落とそうがそれはぼくの責任ではなく、何の学識もなく口にしたことが問題であるのだ。

いや、食すと決まったわけではないけれど。

ぼくが口にするのだけはなんとしても勘弁したい。

今朝頂戴した茸入りスーポの茸が採った物でないことを祈ろう。

誰かに言われた通りに動くというものの詰まらないものだが、この場合茸を狩る以外にすることもない。

とりあえず歩こう。

適当に歩こう。

目的地なんてないけれど、歩き続けたらこの見飽きた森から離脱してどこか違うところに着くだろう。

それはここよりもずっと詰まらない場所かもしれないが、一先ず急変といわずとも変化が欲しかった。

歩き続けた末に待ち受ける場所は何処だろうか。

ぼくはそう決めて歩を止めず、寧ろ加速させた。

『謂われがあらうと無かろうと、どうせ森まできてしまったんだ。茸狩りも案外、悪くないかもしれないぜ?』

先の会話で、少女はそういつてぼくに微笑んで見せた。

無邪気に、とは言わずとも裏があるような笑顔ではなかったことは確かだ。

何故、ぼくは目を、視線を背けたのだろうか。

自分と同じくらい、少なくともプラスマイナス2、3で済みそうな少女に微笑みかけられて照れてしまったのか？

……ぼくがそんなに初心なわけないか。

茸を次から次へと采るように摘んでゆく、茸が群集を成していた箇所が禿げたので近くの雑草を采しり、はらはらと掛けてあげる。

情けは人の為ならず、って言葉のあることを思い出して少しだけ気分が乗った。

情けを掛けたのは人じゃないけれど、これくらい許容範囲、些細なとこだ。

すると当然の如く必然的に雑草のあった箇所が禿げてしまった。

可哀相に。ぼくが采ったんだけど。

再び雑草をかけてあげてもいいのだが、そんなことをしてしまうとキリがなくなってしまう。

采った茸を腕に乗せる。

結構な量が採れたな、と歩きながら腕の上で全重量かけ座している茸共を上から見る。

ありえないような色も、風変わりな物もお目にかかることが出来なかったけどまあこれくらいで十分な量だろう。

そういえば今日は少女の話を聞いていて気絶から起きた後は寝ていないな、本日を振り返りながら呑気に欠伸をする。
授業でもなければ誰かが見ているわけではない。

噛み殺すこともなく伸び伸びとするのはやり気持ちがいい。

排気ガスが舞っていることもないし、欠伸一つでいちいち突っ掛かってくる誰かが居合わせてもいない。

欠伸をすることによって瞑りかけた目を開けると

——長い森を抜けるとそこは曼珠沙華が咲き誇っていた。

雪国、冒頭の『長いトンネルを抜けるとそこは雪国だった』という文章を想起した。

特に意味がないと言えないけれど、そういう言い回しをしてみたかっただけである。

まあ、後付。

『国境の』という単語が抜け落ちてしまっていたか。
彼岸花、又は曼珠沙華。

ヒガンバナ科ヒガンバナ属の多年草。

全草有毒で、異名が不吉で忌み嫌われることもあると言う。

綺麗に、その花を咲き誇らせていた。

赤、黄、白の花びらがそれぞれ同程度の量で乱れて。

視界一杯に、一面を覆い尽くすようにように咲いた彼岸花は、先ほどまで鬱蒼とした森を歩いていたことなど失念してしまうほどに見惚れたといえよう。

我に返る。

いい風致であるのでぼくはここで一つ、歩き続けた足を休めようと座る場所を求め歩みをゆるりと再開する。

ふらふらと歩いていると、遥かに人が立っているのが見えた。先ほどの少女ではない。

背が高く、青色の和服のような物を身に纏い、右手に棒状の何か掴んでいる女性。

顔までは見えなかった。

ここからでは良く見えないし、先のように片手を帽子の『顴』の様に額に当てて、覗き込むように腰から半身を突き出し遠くを眺める仕草をしようと思ったが、効果がなかったことを思い出しやめた。茸を持っていた額は手を当てることも出来ないし。

それにしても、和服で出かける人間も珍しい。

ぼくのような和服とは縁が薄い人間から言わせてもらうならば、夏祭りくらいしか見かけないのが。

ぼくがお目にかかることがなかっただけで、そう珍しくないと言われてしまえばそれまでなのだろうけど。

知らぬ間に、遥かの彼女に視軸を合わせ呆けていた。

特に何も思考せず、遥かの女性を茸を腕の中に抱えたまま見ていた。しかし、呆けていたぼくは次の瞬間目を剥いた。

剥いた、というより目を剥かずには入られない様を見せ付けられた、という方が正確であろう。

景色が歪んだ気がした。

そして、遥かにいたはずの彼女がぼくの眼前に堂々と佇んでいた。

東方茸狩歩（後書き）

遅くなりました。

ここまでは出来ていたのですが、ここで終わらせるのみな、思ったのもう一話いつもより短いですが書きました。

東方再思道（1）（前書き）

誤字、脱字があれば教えていただけると幸いです。
感想もあればいただきたいです。

東方再思道（1）

そして、遙かにいたはずの彼女がぼくの眼前に堂々と佇んでいた。

13

ぼくは驚愕していた。

勿論、眼前の彼女がぼくの視軸の中でやってのけた所業についてだ。彼女はたった一歩で遙かから眼前までの距離を詰めて見せた。

それがどんな方法だったのかは解らないし、種も仕掛けもないものか種と仕掛けが揃っているものなのかも知解らない。

それは――まるで距離を飛んだような。

まるで距離を跳んだような。

まるで距離が狂ったような。

それは宛ら――距離が縮んだようにも見えた。

眼前まで距離を詰めた彼女は、少し近づきすぎた、と言わんばかりに一歩引きばくと彼女の距離を引き伸ばした。

右手に持っていた棒状の物体は鎌だった。

鎌。

それも草刈鎌でも木刈鎌でも芝刈鎌でもない、大鎌。

刃が大きく、そして長く、弧状に反って禍々しさを感じさせる。

農具なんて生易しいものじゃない。

あれは確実に堅実に命を刈り取る形だ。

死神が持つような、大鎌。

こちらに向いていない刃が太陽の光を絶つように反射し、彼岸花に影を落としていた。

「やあ、こんにちは」

「こんにちは」

唐突に彼女が口を開き、当たり障りない言葉をぼくに向かってかけたので、ぼくもそれに倣って鸚鵡返しのように返した。

見ず知らずの人に挨拶をするような人がいたとは、服装はともかく持ち物は非常識で奇抜極まりないがそう悪い人ではないのかもしれない。

まあ、挨拶一つで人柄を掴めるわけじゃないけど。

挨拶のみで終わると勘違いしたぼくは、目を逸らし歩きだそうと足を踏み出した瞬間。

「お前さん、こんな所で何をしているんだい？」

「茸狩りですよ」

「ふうん……」

意味深長な笑みを浮かべながら、顎に大鎌を持っていない方の手を当ててぼくを見透かすように見る。

本当に見透かしているのかは兎も角、あまりされていい気分の眼ではないが、不快を表に出すようなことはせずに彼女の次の言葉を待つ。

「あたいは小野塚小町、しがない死神さ」

死神なんて大層な役職に就いているのだから、もっと堂々としてもいいと思うのだが随分と卑屈な言い方だな、と思った。死神といってもぼくの想像していた者とは大分違った。

大鎌は想像とさして変わらないが。

「……ぼくの記憶では死神は『最高神に仕える農夫』、だったんですけど、間違っていました？」

「いいや、間違っていない。しかし農夫も農婦も大して変わらないいさ、それが男か女、やっていることはさして違わないし漢字は違えど口に出してしまえば判らないだろう？」

「随分と適当に言いますね」

「冗談さ。こんな適当で曖昧な答が通るとは思ってないよ、それに白黒はつきりさせないと映姫様に長いお話を聞かされる羽目になるからね」

「映姫様が誰だかは知りませんが――では、適当で曖昧でない答を伺ってもいいですか？」すると女性は両の目を静かに閉じた。

「ああ、いいさ。まあ答は単純明快にあれさ――『最高神に仕える農夫』というのは外の常識、幻想郷そちらの死神の常識は違う。農夫でもなければ最高神に仕えているわけでもないのさ、故に男女は問わな

いんだよ」

「前提からして、違うということですか。しかし、さっき『間違っ
てない』と言いましたよね？」

「『間違っ
てない』じゃなくて『間違っ
てはいない』、さ。聞き間
違いは誰でもある、あまりきにしないでいいさ。まあ、^{そっち}外の話も聞
いたことがあったからね」

「成る程」

しかしまた常識に幻想郷か。

あの荒唐無稽だと嘲った話少女の話は嘘ではなかったのか？
信じる信じない、事実虚偽は置いておいて話は合わせた方が無難だ
ろう。

しかし何故、ぼくはこんなわけのわからないトンデモ世界に来てし
まったのだろうか、いや、自分の意思で来たわけじゃないけど。
大鎌が重いのか、女性は大鎌を構え直し両の目を開きながらぼくに
質問をぶつける。

「話を戻すと、お前さんは後ろにある魔法の森で茸狩りをしていた
んだよね？」

「はい」

「死にに来たんじゃあ、ないよね？」

「ええ」

「そうかい、それなら安心して眠れるよ」

ほっとしたようで、解っていたように息を吐く。

「いや、お前さんがさ、今にも死にそうな目をしていたから少し心配になったのさ」

東方再思道（1）（後書き）

この後も会話が続くのでここで切るのも不自然ですが、切るとしたらここしかありませんでした。

全て書いてしまうとこの話だけ長くなってしまいそうなので。

テストがあり帰宅が早いので、その時間を使えば次の投稿までそこまで時間はかからなさそうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1968s/>

東方再始蝕

2011年10月8日23時13分発行